

## 自分をつくったもの

2020.12.23

私は背が低かった。いや今でも日本人男性の平均身長よりも5cmは低い。今でも覚えているが、小学校を卒業するとき139.8cmしかなかった。「前ならえ」と言われても両腕をまっすぐ伸ばすことができなかった。いつも列の先頭だったからである。小学1年生から6年生までずっとそうだった。

そんな私が中学校に入った。前から4番目になった。なんとクラスに私より小さい人が3人もいた。うれしかった。これで「前ならえ」で腕をまっすぐ伸ばすことができると思った。

中学校に入って楽しみなのは、3つの小学校が集まることと、英語という新しい教科、そして部活動である。私なりにどの部活動に入るか真剣に考えた。背が低いということでバレーボール、バスケットボールが真っ先に消えた。野球は運動ができそうな人がたくさんいた。サッカー部はなかった。文化部は頭になかった。最後に残ったのがテニス部だった。私にもできると思った。小学生のうちからやっている人はいないので、みんな同じスタートラインだと思った。

中学1年生のときの担任の先生は女性の保健体育の先生だった。はじめてテニス部に行ったとき、テニスコートにはその先生がいた。担任の先生と部活動の先生が同じ人だった。入ってから先生や先輩に言われるままにボール拾いを一生懸命やった。苦痛に感じたことは一度もなかった。むしろ楽しかった。ある日先生から「1年生の中から一生懸命がんばっている人を3人だけ大会に連れていきます」という話があった。私は大会に行ってみたかった。今まで以上にボール拾いに燃えた。いよいよ3人の名前が発表される日がやってきた。私の名前が呼ばれた。うれしかった。

幸いにも中学1年生の秋から選手として大会に出させてもらった。いわゆるレギュラーという存在である。その後も中学3年生の夏までずっと選手として数多くの試合に出た。途中からは副部長にもなった。結局中学3年間で1日も部活動を休むことはなかった。それ以前に1日も学校を休まなかった。部活動を休むことなど考えもしなかった。楽しくて仕方がなかった。部活動がある日には用事をつくらなかった。高校、大学とずっとテニスを続けたが、よほどのことがない限り練習を休むことはなかった。そうしようと心に決めていたわけではなく、結果的に自然とそうってしまった。

中学3年生の夏の最後の大会が終わって、その感慨に浸る間もなく高校に行ってもまたテニスを続けようと考えていた。受験勉強が終われば、またテニスができると思っていた。志望校に無事合格し、早速軟式テニス部（現ソフトテニス部）に入った。しかし、今度は中学時代と違って指導者がいなかった。顧問の先生はいても指導者はいなかった。挙げ句の果てに大会に行っても先輩たちは弱かった。少なからずがっかりした。もう少し強くなりたいと思った。

先輩たちが引退して自分たちの時代がやってきた。指導者がいないので全部自分たちでやっていた。2年生の夏からは部長になった。練習内容から練習試合の交渉、大会に出る選手の決定、戦術面など、すべて自分でやった。それなりのプレッシャーもあり、まずは自分が態度で範を示すしかなかった。私が1年生の頃はあまり強くなかったチームも、仲間に恵まれたおかげで徐々に強くなっていった。すると、いろいろな人たちが練習の相手をしてくれたり、アドバイスをしてくれたりするようになった。

(次号に続く)